

# 新十津川町農業委員会「農地等の利用の最適化の推進に関する指針」

令和 5 年 3 月 23 日  
新十津川町農業委員会

## 第1 基本的な考え方

農業委員会等に関する法律（昭和 26 年法律第 88 号。以下「法」という。）の改正法が平成 28 年 4 月 1 日に施行され、農業委員会においては「農地等の利用の最適化の推進」が最も重要な必須事務として、明確に位置づけられた。

新十津川町は、石狩川及び徳富川流域の平野部から丘陵地帯を経て、山岳地帯で構成されている。平野部は石狩平野に属しており、農業、特に水稻に適した肥沃な大地が広がっている。山間部、狭量部においても、水稻や麦・大豆・そばなど土地利用型作物を中心に良好な耕作、管理が行なわれている。また、西部地区においては、酒米が北海道一の作付面積であるなど、それぞれの地域の実態に応じた取り組みがなされている状況である。

農地の集積率が高く、遊休農地も発生していない状況であることから、当面はこの状況を維持することに努めていく。しかしながら、今後農業者の高齢化及び離農者の増加が見込まれ、農地の引き受け手が減少していく事から、遊休農地の発生及び耕作放棄地の発生の防止に努めるため、「地域計画」（農業経営基盤強化促進法等の一部を改正する法律案（令和 4 年法律第 56 号）による改正後の農業経営基盤強化促進法（昭和 55 年法律第 65 号。以下「改正基盤法」という。）第 19 条第 1 項の規定に基づき、市町村が、農業者等の協議の結果を踏まえ、農業の将来の在り方や農用地の効率的かつ総合的な利用に関する目標として農業を担う者ごとに利用する農用地等を表示した地図などを明確化し、公表したものをいう。）に基づいて農地中間管理事業を活用した利用調整に取り組んでいく必要がある。

以上のような観点から、地域の強みを活かしながら、活力ある農業・農村を築くため、法第 7 条第 1 項に基づき、農業委員が、担当区域ごとの活動を通じて「農地等の利用の最適化」が一体的に進んでいくよう、新十津川町農業委員会の指針として、具体的な目標と推進方法、目標の達成状況に対する評価方法を以下のとおり定める。

なお、この指針は、改正基盤法第 5 条第 1 項に規定する北海道の農業経営基盤の強化の促進に関する基本方針及び改正基盤法第 6 条第 1 項に規定する新十津川町の農業経営基盤の強化の促進に関する基本構想を踏まえた農業委員会の長期的な目標として 10 年後に目指す農地の状況等を示すものであり、農業委員及び推進委員の改選期である 3 年ごとに検証・見直しを行う。

また、単年度の具体的な活動については、「農業委員会による最適化活動の推進等について」（令和 4 年 2 月 2 日付け 3 経営第 2584 号農林水産省経営局長通知、令和 4 年 2 月 25 日付け 3 経営第 2816 号農林水産省経営局農地政策課長通知）に基づく「最適化活動の目標の設定等」のとおりとする。

## 第2 具体的な目標、推進方法及び評価方法

### 1. 遊休農地の発生防止・解消について

(1) 遊休農地の解消目標

	管内の農地面積(A)	遊休農地面積(B)	遊休農地の割合(B/A)
現 状 (令和4年3月)	5,380 ha	0 ha	0 %
3年後の目標 (令和7年3月)	5,380 ha	0 ha	0 %
目 標 (令和14年3月)	5,380 ha	0 ha	0 %

(2) 遊休農地の発生防止・解消の具体的な推進方法

① 農地の利用状況調査と利用意向調査の実施について

農業委員による農地法（昭和27年法律第229号）第30条第1項の規定による利用状況調査（以下「利用状況調査」という。）の実施について協議・検討し、調査を行う。同法第32条第1項の規定による利用意向調査（以下「利用意向調査」という。）については、利用状況調査の結果により遊休農地が発生した時にその実施を協議・検討し、調査を行う。それぞれの調査時期については、「農地法の運用について」（平成21年12月11日付け21経営第4530号・21農振第1598号農林水産省経営局長・農村振興局長連名通知）に基づき実施する。

なお、従来から農地パトロールの中で行っていた、違反転用の発生防止・早期発見等、農地の適正な利用の確認に関する現場活動については、利用状況調査の時期にかかわらず日常的に実施する。

- 利用意向調査の結果を踏まえ、農地法第34条に基づく農地の利用関係の調整を行う。
- 利用状況調査と利用意向調査の結果は、速やかに「農業委員会サポートシステム」に反映し、農地台帳の正確な記録の確保と公表の迅速化を図る。

② 農地中間管理機構との連携について

- 利用意向調査の結果を受け、農家の意向を踏まえた農地中間管理機構への貸付け手続きを行う。

③ 非農地判断について

- 利用状況調査によって、再生利用が困難と区分された農地については、現況に応じて速やかに「非農地判断」を行い、守るべき農地を明確化する。

(3) 遊休農地の発生防止・解消の評価方法

遊休農地を発生させないことを基本とするが、もし発生した場合は、その発生防止・解消の進捗状況は、遊休農地の割合により評価する。

単年度の評価については、「農業委員会による最適化活動の推進等について」に基づく「農業委員会の農地利用の最適化の推進の状況その他事務の実施状況の公表」のとおりとする。

## 2. 担い手への農地利用の集積・集約化について

### (1) 担い手への農地利用集積目標

	管内の農地面積(A)	集積面積(B)	集積率(B/A)
現 状 (令和4年3月)	5,380 ha	5,143 ha	95.6 %
3年後の目標 (令和7年3月)	5,380 ha	5,111 ha	95.0 %
目 標 (令和14年3月)	5,380 ha	5,111 ha	95.0 %

### 【参考】担い手の育成・確保

	農業経営体数 (うち、主業農家数)	担い手			
		認定農業者	認定新規就農者	基本構想水準到達者	特定農業団体 その他の集落 営農組織
現 状 (令和4年3月)	336 戸 (214 戸)	239 経営体			
3年後の目標 (令和7年3月)	325 戸 (205 戸)	225 経営体			
目 標 (令和14年3月)	300 戸 (180 戸)	200 経営体			

### (2) 担い手への農地利用の集積・集約化に向けた具体的な推進方法

#### ① 「地域計画」の作成・見直しについて

- 農業委員会として、人と農地の問題を解決するため、10年後の農業の在り方と農地利用の将来像を描く「地域計画」の作成と見直しに主体的に取り組む。

#### ② 農地中間管理機構等との連携について

- 農業委員会は、新十津川町、農地中間管理機構、ピンネ農協等と連携し、(ア)農地中間管理機構に貸付けを希望する復元可能な遊休農地、(イ)経営の廃止・縮小を希望する高齢農家等の農地、(ウ)利用権の設定期間が満了する農地等についてリスト化を行い「地域計画」の作成・見直し、農地中間管理事業の活用を検討するなど、農地の出し手と受け手の意向を踏まえたマッチングを行う。

#### ③ 農地の利用調整と利用権設定について

- 担い手への農地利用の集積が進んでいるため、離農者が出た場合には、担い手の意向を

踏まえた農地の集約化のための利用調整・交換を行うとともに、賃貸の継続を要望する所有者等には、利用権の再設定を推進する。

また、中山間地域等の農地の区画・形状が悪く、受け手が少ない又は受け手がない地域が発生した場合には、農地中間管理機構による簡易な基盤整備事業の活用と併せて集落営農の組織化・法人化、新規参入の受入れを検討するなど、地域に応じた取り組みを推進する。

#### ④ 農地の所有者等を確知することができない農地の取扱い

- 農地の所有者等を確知することができない農地については、公示手続を経て農地中間管理機構を通じて利用権設定ができる制度を活用し、農地の有効利用に努める。

### (3) 担い手への農地利用の集積・集約化の評価方法

担い手への農地利用の集積・集約化の進捗状況は、農地の集積率により評価する。

単年度の評価については、「農業委員会による最適化活動の推進等について」に基づく「農業委員会の農地利用の最適化の推進の状況その他事務の実施状況の公表」のとおりとする。

## 3. 新規参入の促進について

### (1) 新規参入の促進目標

	新規参入者数（個人） （新規参入者取得面積）	新規参入者数（法人） （新規参入者取得面積）
現 状 （令和4年3月）	0 人 ( 0 ha)	0 法人 ( 0 ha)
3年後の目標 （令和7年3月）	0 人 ( 0 ha)	0 法人 ( 0 ha)
目 標 （令和14年3月）	1 人 ( 5 ha)	0 法人 ( 0 ha)

### (2) 新規参入の促進に向けた具体的な推進方法

#### ① 関係機関との連携について

- 北海道・全国の農業委員会ネットワーク機構、農地中間管理機構等と連携し、管内の農地の借入れ意向のある認定農業者及び参入希望者（個人、法人）を把握し、必要に応じて現地見学や相談会を実施する。

#### ② 新規就農フェア等への参加について

- 新十津川町、ピンネ農協、ピンネ農業公社等と連携し、農業委員が新規就農フェア等に参加するなど新規就農希望者の情報収集に努め、必要に応じて新規就農の受入れとフォローアップ体制を整備する。

### ③ 企業参入の推進について

- 農業参入する企業も地域の担い手となり得ることから、農地中間管理機構を活用して、必要に応じて企業の参入の推進を図る。

### ④ 農業委員会のフォローアップ活動について

- 水稲地帯である新十津川町は、農地の確保、農業機械の導入及び多額の資金借入の面など新規参入に対する課題が多い。そのため、現状の担い手対策は、農業後継者を中心にならざるを得ない状況である。しかし、農地の確保などが比較的容易な園芸作物は、条件を整えば新規参入できた経緯があることから、必要に応じて農業委員は、新規参入者（個人、法人）の地域の受入条件の整備を図るとともに、後見人等の役割を担う。

### (3) 新規参入の促進の評価方法

新規参入の促進の進捗状況は、新十津川町の実情に応じ10年後の新規参入者（個人、法人）の数により評価する。

単年度の評価については、「農業委員会による最適化活動の推進等について」に基づく「農業委員会の農地利用の最適化の推進の状況その他事務の実施状況の公表」のとおりとする。

## 第3 「地域計画」の目標を達成するための役割

新十津川町において作成された「地域計画」に基づき、農地を効率的かつ総合的に利用していくため、新十津川町農業委員会は次の役割を担っていく。

- ・ 日常的な農地の見守りによる農地の適正利用の確認
- ・ 農家への声掛け等による意向把握
- ・ 「地域計画」で位置付けられた担い手への農地の利用調整やマッチング
- ・ 農地中間管理事業の活用の働きかけ
- ・ 「地域計画」の定期的な見直しへの協力